みだれ髪

与謝野晶子

青空文庫

この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり表紙画
みだれ髪の輪郭は恋愛の矢のハートを射たるにて矢の根
より吹き出でたる花は詩を意味せるなり

臙脂紫

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ

歌にきけな誰れ野の花に紅き否むおもむきあるかな春罪もつ子

髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ

血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を行く人神おとしめな

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃に見る

その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな

堂の鐘のひくきゆふべを前髪の桃のつぼみに経たまへ君

紫にもみうらにほふみだれ篋をかくしわづらふ宵の春の神

臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命

紫の濃き虹説きしさかづきに映る春の子眉毛かぼそき

紺青を絹にわが泣く春の暮やまぶきがさね友歌ねびぬ

まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はらから牡丹に名なき

海棠にえうなくときし紅すてて夕雨みやる瞳よたゆき

水にねし嵯峨の大堰のひと夜神絽蚊帳の裾の歌ひめたまへ

春の国恋の御国のあさぼらけしるきは髪か梅花のあぶら

今はゆかむさらばと云ひし夜の神の御裾さはりてわが髪ぬれぬ

細きわがうなじにあまる御手のべてささへたまへな帰る夜の神

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

秋の神の御衣より曳く白き虹ものおもふ子の額に消えぬ

経はにがし春のゆふべを奥の院の二十五菩薩歌うけたまへ

山ごもりかくてあれなのみをしへよ紅つくるころ桃の花さかむ

とき髪に室むつまじの百合のかをり消えをあやぶむ夜の淡紅色よ

雲ぞ青き来し夏姫が朝の髪うつくしいかな水に流るる

夜の神の朝のり帰る羊とらへちさき枕のしたにかくさむ

みぎはくる牛かひ男歌あれな秋のみづうみあまりさびしき

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

許したまへあらずばこその今のわが身うすむらさきの酒うつくしき

わすれがたきとのみに趣味をみとめませ説かじ紫その秋の花

人かへさず暮れむの春の宵ごこち小琴にもたす乱れ乱れ髪

たまくらに鬢のひとすぢきれし音を小琴と聞きし春の夜の夢

春雨にぬれて君こし草の門よおもはれ顔の海棠の夕

小草いひぬ『酔へる涙の色にさかむそれまで斯くて覚めざれな少女』

牧場いでて南にはしる水ながしさても緑の野にふさふ君

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿ゐならぶ子らよ束の間老いな

雨みゆるうき葉しら蓮絵師の君に傘まゐらする三尺の船

御相いとどしたしみやすきなつかしき若葉木立の中の盧遮那仏

さて責むな高きにのぼり君みずや紅の涙の永劫のあと

春雨にゆふべの宮をまよひ出でし小羊君をのろはしの我れ

ゆあみする泉の底の小百合花二十の夏をうつくしと見ぬ

みだれごこちまどひごこちぞ頻なる百合ふむ神に乳おほひあへず

くれなゐの薔薇のかさねの唇に霊の香のなき歌のせますな

旅のやど水に端居の僧の君をいみじと泣きぬ夏の夜の月

春の夜の闇の中くるあまき風しばしかの子が髪に吹かざれ

水に飢ゑて森をさまよふ小羊のそのまなざしに似たらずや君

誰ぞ夕ひがし生駒の山の上のまよひの雲にこの子うらなへ

悔いますなおさへし袖に折れし剣つひの理想の花に刺あらじ

額ごしに暁の月みる加茂川の浅水色のみだれ藻染よ

御袖くくりかへりますかの薄闇の欄干夏の加茂川の神

なほ許せ御国遠くば夜の御神紅盃船に送りまゐらせむ

狂ひの子われに焔の翅かろき百三十里あわただしの旅

今ここにかへりみすればわがなさけ闇をおそれぬめしひに似たり

うつくしき命を惜しと神のいひぬ願ひのそれは果してし今

わかき小指胡紛をとくにまどひあり夕ぐれ寒き木蓮の花

ゆるされし朝よそほひのしばらくを君に歌へな山の鶯

ふしませとその間さがりし春の宵衣桁にかけし御袖かづきぬ

みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐませの君ゆりおこす

しのび足に君を追ひゆく薄月夜右のたもとの文がらおもき

紫に小草が上へ影おちぬ野の春かぜに髪けづる朝

絵日傘をかなたの岸の草になげわたる小川よ春の水ぬるき

しら壁へ歌ひとつ染めむねがひにて笠はあらざりき二百里の旅

嵯峨の君を歌に仮せなの朝のすさびすねし鏡のわが夏姿

ふさひ知らぬ新婦かざすしら萩に今宵の神のそと片笑みし

ひと枝の野の梅をらば足りぬべしこれかりそめのかりそめの別れ

鶯は君が夢よともどきながら緑のとばりそとかかげ見る

紫の紅の滴り花におちて成りしかひなの夢うたがふな

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき

紫の理想の雲はちぎれ〳〵仰ぐわが空それはた消えぬ

乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬここなる花の紅ぞ濃き

神の背にひろきながめをねがはずや今かたかたの袖こむらさき

とや心朝の小琴の四つの緒のひとつを永久に神きりすてし

ひく袖に片笑もらす春ぞわかき朝のうしほの恋のたはぶれ

くれの春隣すむ画師うつくしき今朝山吹に声わかかりし

郷人にとなり邸のしら藤の花はとのみに問ひもかねたる

人にそひて榛ささぐるこもり妻母なる君を御墓に泣きぬ

なにとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな

おばしまにおもひはてなき身をもたせ小萩をわたる秋の風見る

ゆあみして泉を出でしわがはだにふるるはつらき人の世のきぬ

売りし琴にむつびの曲をのせしひびき逢魔がどきの黒百合折れぬ

うすものの二尺のたもとすべりおちて蛍ながるる夜風の青き

恋ならぬねざめたたずむ野のひろさ名なし小川のうつくしき夏

このおもひ何とならむのまどひもちしその昨日すらさびしかりし我れ

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞろや夜を蝶のねにこし

その涙のごふえにしは持たざりきさびしの水に見し二十日月

水十里ゆふべの船をあだにやりて柳による子ぬかうつくしき（をとめ）

旅の身の大河ひとつまどはむや徐かに日記の里の名けしぬ（旅びと）

小傘とりて朝の水くみ我とこそ穂麦あをあを小雨ふる里

おとに立ちて小川をのぞく乳母が小窓小雨のなかに山吹のちる

恋か血か牡丹に尽きし春のおもひとのゐの宵のひとり歌なき

長き歌を牡丹にあれの宵の殿妻となる身の我れぬけ出でし

春三月柱おかぬ琴に音たてぬふれしそぞろの宵の乱れ髪

いづこまで君は帰るとゆふべ野にわが袖ひきぬ翅ある童

ゆふぐれの戸に倚り君がうたふ歌『うき里去りて往きて帰らじ』

さびしさに百二十里をそぞろ来ぬと云ふ人あらばあらば如何ならむ

君が歌に袖かみし子を誰と知る浪速の宿は秋寒かりき

その日より魂にわかれし我れむくろ美しと見ば人にとぶらへ

今の我に歌のありやを問ひますな柱なき繊絃これ二十五絃

神のさだめ命のひびき終の我世琴に斧うつ音ききたまへ

人ふたり無才(ぶさい)の二字を歌に笑みぬ恋(こひ)二万年(ねん)ながき短き

蓮の花船

漕ぎかへる夕船おそき僧の君紅蓮や多きしら蓮や多き

あづまやに水のおときく藤の夕はづしますなのひくき枕よ

御袖ならず御髪のたけときこえたり七尺いづれしら藤の花

夏花のすがたは細きくれなゐに真昼いきむの恋よこの子よ

肩おちて経にゆらぎのそぞろ髪をとめ有心者春の雲こき

とき髪を若枝にからむ風の西よ二尺に足らぬうつくしき虹

うながされて汀の闇に車おりぬほの紫の反橋の藤

われとなく梭の手とめし門の唄姉がゑまひの底はづかしき

ゆあがりのみじまひなりて姿見に笑みし昨日の無きにしもあらず

人まへを袂すべりしきぬでまり知らずと云ひてかかへてにげぬ

ひとつ箋にひひなをさめて蓋とぢて何となき息桃にはばかる

ほの見しは奈良のはづれの若葉宿うすまゆずみのなつかしかりし

紅に名の知らぬ花さく野の小道いそぎたまふな小傘の一人

くだり船昨夜月かげに歌そめし御堂の壁も見えず見えずなりぬ

師の君の目を病みませる庵の庭へうつしまゐらす白菊の花

文字ほそく君が歌ひとつ染めつけぬ玉虫ひめし小筥の蓋に

ゆふぐれを籠へ鳥よぶいもうとの爪先ぬらす海棠の雨

ゆく春をえらびよしある絹袷衣ねびのよそめを一人に問ひぬ

ぬしいはずとれなの筆の水の夕そよ墨足らぬ撫子がさね

母よびてあかつき問ひし君といはれそむくる片頬柳にふれぬ

のろひ歌かきかさねたる反古とりて黒き胡蝶をおさへぬるかな

額しろき聖よ見ずや夕ぐれを海棠に立つ春夢見姿

笛の音に法華経うつす手をとどめひそめし眉よまだうらわかき

白檀のけむりこなたへ絶えずあふるにくき扇をうばひぬるかな

母なるが枕経よむかたはらのちひさき足をうつくしと見き

わが歌に瞳のいろをうるませしその君去りて十日たちにけり

かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあやふくなりにけるかな

春の川のりあひ舟のわかき子が昨夜の泊の唄ねたましき

泣かで急げやは手にはばき解くえにしえにし持つ子の夕を待たむ

燕なく朝をはばきの紐ぞゆるき柳かすむやその家のめぐり

小川われ村のはづれの柳かげに消えぬ姿を泣く子朝見し

鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつまじき

道たま〳〵蓮月が庵のあとに出でぬ梅に相行く西の京の山

君が前に李青蓮説くこの子ならずよき墨なきを梅にかこつな

あるときはねたしと見たる友の髪に香の煙のはひかかるかな

わが春の二十姿と打ぞ見ぬ底くれなゐのうす色牡丹

春はただ盃にこそ注ぐべけれ智慧あり顔の木蓮や花

さはいへど君が昨日の恋がたりひだり枕の切なき夜半よ

人そぞろ宵の羽織の肩うらへかきしは歌か芙蓉といふ文字

琴の上に梅の実おつる宿の昼よちかき清水に歌ずする君

うたたねの君がかたへの旅づつみ恋の詩集の古きあたらしき

戸に倚りて菖蒲売る子がひたひ髪にかかる薄靄にほひある朝

五月雨もむかしに遠き山の庵通夜する人に卯の花いけぬ

四十八寺そのひと寺の鐘なりぬ今し江の北雨雲ひくき

人の子にかせしは罪かわがかひな白きは神になどゆづるべき

ふりかへり許したまへの袖だたみ闇くる風に春ときめきぬ

夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とはで宿とりたまへ

巌をはなれ谿をくだりて躑躅をりて都の絵師と水に別れぬ

春の日を恋に誰れ倚るしら壁ぞ憂きは旅の子藤たそがるる

油のあと島田のかたと今日知りし壁に李の花ちりかかる

うなじ手にひくきささやき藤の朝をよしなやこの子行くは旅の君

まどひなくて経ずする我と見たまふか下品の仏上品の仏

ながしつる四つの笹舟紅梅を載せしがことにおくれて往きぬ

奥の室のうらめづらしき初声に血の気のぼりし面まだ若き

人の歌をくちずさみつつ夕よる柱つめたき秋の雨かな

小百合さく小草がなかに君まてば野末にほひて虹あらはれぬ

かしこしといなみにいひて我とこそその山坂を御手に倚らざりし

鳥辺野は御親の御墓あるところ清水坂に歌はなかりき

御親まつる墓のしら梅中に白く熊笹小笹たそがれそめぬ

男きよし載するに僧のうらわかき月にくらしの蓮の花船

経にわかき僧のみこゑの片明り月の蓮船兄こぎかへる

浮葉きるとぬれし袂の紅のしづく蓮にそそぎてなさけ教へむ

こころみにわかき唇ふれて見れば冷かなるよしら蓮の露

明くる夜の河はばひろき嵯峨の欄きぬ水色の二人の夏よ

藻の花のしろきを摘むと山みづに文がら濡ぢぬうすものの袖

牛の子を木かげに立たせ絵にうつす君がゆかたに柿の花ちる

誰が筆に染めし扇ぞ去年までは白きをめでし君にやはあらぬ

おもざしの似たるにまたもまどひけりたはぶれますよ恋の神々

五月雨に築土くづれし鳥羽殿のいぬゐの池におもだかさきぬ

つばくらの羽にしたたる春雨をうけてなでむかわが朝寝髪

しら菊を折りてゑまひし朝すがた垣間みしつと人の書きこし

八つ口をむらさき緒もて我れとめじひかばあたへむ三尺の袖

春かぜに桜花ちる層塔のゆふべを鳩の羽に歌そめむ

憎からぬねたみもつ子ときき し子の垣の山吹歌うて過ぎぬ

おばしまのその片袖ぞおもかりし鞍馬を西へ流れにし霞

ひとたびは神より更ににほひ高き朝をつつみし練(ねり)の下襲(したがさね)

白百合

月の夜の蓮(はす)のおばしま君うつくしうら葉の御歌(みうた)わすれはせずよ

たけの髪をとめ二人(ふたり)に月うすき今宵しら蓮(はす)色まどはずや

荷葉(はす)なかば誰にゆるすの上(かみ)の御句(みく)ぞ御袖片取(みそでかたと)るわかき師の君

おもひおもふ今のこころに分ち分かず君やしら萩われやしろ百合

いづれ君ふるさと遠き人の世ぞと御手はなちしは昨日(きのふ)の夕

三たりをば世にうらぶれしはらからとわれ先づ云ひぬ西の京の宿

今宵(こよひ)まくら神にゆづらぬやは手なりたがはせまさじ白百合の夢

夢にせめてせめてと思ひその神に小百合の露の歌ささやきぬ

次のまのあま戸そとくるわれをよびて秋の夜いかに長きみぢかき

友のあしのつめたかりきと旅の朝わかきわが師に心なくいひぬ

ひとまおきてをりをりもれし君がいきその夜しら梅だくと夢みし

いはず聴かずただうなづきて別れけりその日は六日二人(ふたり)と一人(ひとり)

もろ羽かはし掩ひしそれも甲斐なかりきうつくしの友西の京の秋

星となりて逢はむそれまで思ひ出でな一つふすまに聞きし秋の声

人の世に才秀でたるわが友の名の末かなし今日(けふ)秋くれぬ

星の子のあまりによわし袂あげて魔にも鬼にも勝(か)たむと云へな

百合の花わざと魔の手に折らせおきて拾ひてだかむ神のこころか

しろ百合はそれその人の高きおもひおもわは艶(にほ)ふ紅芙蓉(べにふよう)とこそ

さはいへどそのひと時よまばゆかりき夏の野しめし白百合の花

友は二十(はたち)ふたつこしたる我身なりふさはずあらじ恋と伝へむ

その血潮ふたりは吐かぬちぎりなりき春を山蓼(やまたで)たづねますな君

秋を三人(みたり)椎の実なげし鯉やいづこ池の朝かぜ手と手つめたき

かの空よ若狭は北よわれ載せて行く雲なきか西の京の山

ひと花はみづから涙にもとめきませ若狭の雪に堪へむ紅(くれなゐ)

『筆のあとに山居(やまゐ)のさまを知りたまへ』人への人の文さりげなき

京はもののつらきところと書きさして見おろしませる加茂の河しろき

恨みまつる湯におりしまの一人居(ひとりゐ)を歌なかりきの君へだてあり

秋の衾(ふすま)あしたわびし身うらめしきつめたきためし春の京に得ぬ

わすれては谿へおりますうしろ影ほそき御肩(みかた)に春の日よわき

京の鐘この日このとき我れあらずこの日このとき人と人を泣きぬ

琵琶の海山ごえ行かむいざと云ひし秋よ三人(みたり)よ人そぞろなりし

京の水の深み見おろし秋を人の裂きし小指(をゆび)の血のあと寒き

山蓼のそれよりふかきくれなゐは梅よはばかれ神にとがおはむ

魔のまへに理想(おもひ)くだきしよわき子と友のゆふべをゆびさしますな

魔のわざを神のさだめと眼を閉ぢし友の片手の花あやぶみぬ

歌をかぞへその子この子にならふなのまだ寸(すん)ならぬ白百合の芽よ

はたち妻

露にさめて瞳もたぐる野の色よ夢のただちの紫の虹

やれ壁にチチアンが名はつらかりき湧く酒がめを夕に秘めな

何となきただ一ひらの雲に見ぬみちびきさとし聖歌のにほひ

神にそむきふたたびここに君と見ぬ別れの別れさいへ乱れじ

淵の水になげし聖書を又もひろひ空仰ぎ泣くわれまどひの子

聖書だく子人の御親の墓に伏して弥勒の名をば夕に喚びぬ

神ここに力をわびぬとき紅のにほひ興がるめしひの少女

痩せにたれかひなもる血ぞ猶わかき罪を泣く子と神よ見ますな

おもはずや夢ねがはずや若人よもゆるくちびる君に映らずや

君さらば巫山の春のひと夜妻またの世までは忘れゐたまへ

あまきにがき味うたがひぬ我を見てわかきひじりの流しにし涙

歌に名は相問はざりきさいへ一夜ゐにしのほかの一夜とおぼすな

水の香をきぬにおほひぬわかき神草には見えぬ風のゆるぎよ

ゆく水のざれ言きかす神の笑まひ御歯あざやかに花の夜あけぬ

百合にやる天の小蝶のみづいろの翅にしつけの糸をとる神

ひとつ血の胸くれなゐの春のいのちひれふすかをり神もとめよる

わがいだくおもかげ君はそこに見む春のゆふべの黄雲のちぎれ

むねの清水あふれてつひに濁りけり君も罪の子我も罪の子

うらわかき僧よびさます春の窓ふり袖ふれて経くづれきぬ

今日を知らず智慧の小石は問はでありき星のおきてと別れにし朝

春にがき貝多羅葉の名をききて堂の夕日に友の世泣きぬ

ふた月を歌にただある三本樹加茂川千鳥恋はなき子ぞ

わかき子が乳の香まじる春雨に上羽を染めむ白き鳩われ

夕ぐれを花にかくるる小狐のにこ毛にひびく北嵯峨の鐘

見しはそれ緑の夢のほそき夢ゆるせ旅人かたり草なき

胸と胸とおもひことなる松のかぜ友の頬を吹きぬ我頬を吹きぬ

野茨(のばら)をりて髪にもかざし手にもとり永き日野辺に君まちわびぬ

春を説くなその朝かぜにほころびし袂だく子に君こころなき

春をおなじ急瀬(はやせ)さばしる若鮎の釣緒(つりを)の細緒くれなゐならぬ

みなぞこにけぶる黒髪ぬしや誰れ緋鯉のせなに梅の花ちる

秋を人のよりし柱にとがめあり梅にことかるきぬぎぬの歌

京の山のこぞめしら梅人ふたりおなじ夢みし春と知りたまへ

なつかしの湯の香梅が香山の宿の板戸によりて人まちし闇

詞にも歌にもなさじわがおもひその日そのとき胸より胸に

歌にねて昨夜(よべ)梶の葉の作者見ぬうつくしかりき黒髪の色

下京(しもぎやう)や紅屋(べにや)が門(かど)をくぐりたる男かはゆし春の夜の月

枝折戸あり紅梅さけり水ゆけり立つ子われより笑みうつくしき

しら梅は袖に湯の香は下のきぬにかりそめながら君さらばさらば

二十(はた)とせの我世の幸(さち)はうすかりきせめて今見る夢やすかれな

二十(はた)とせのうすきいのちのひびきありと浪華の夏の歌に泣きし君

かづくきぬにその間(ま)の床(とこ)の梅ぞにくき昔がたりを夢に寄する君

それ終に夢にはあらぬそら語り中(なか)のともしびいつ君きえし

君ゆくとその夕ぐれに二人して柱にそめし白萩の歌

なさけあせし文みて病みておとろへてかくても人を猶恋ひわたる

夜の神のあともとめよるしら綾の鬢の香朝の春雨の宿

その子ここに夕片笑(ゆふかたゑ)みの二十(はたち)びと虹のはしらを説くに隠れぬ

このあした君があげたるみどり子のやがて得む恋うつくしかれな

恋の神にむくいまつりし今日の歌ゑにしの神はいつ受けまさむ

かくてなほあくがれますか真善美わが手の花はくれなゐよ君

くろ髪の千すぢの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる

そよ理想おもひにうすき身なればか朝の露草人ねたかりし

とどめあへぬそぞろ心は人しらむくづれし牡丹さぎぬに紅き

『あらざりき』そは後の人のつぶやきし我には永久のうつくしの夢

行く春の一絃一柱におもひありさいへ火かげのわが髪ながき

のらす神あふぎ見するに瞼おもきわが世の闇の夢の小夜中

そのわかき羊は誰に似たるぞの瞳の御色野は夕なりし

あえかなる白きうすものまなじりの火かげの栄の詛はしき君

紅梅にそぞろゆきたる京の山叔母の尼すむ寺は訪はざりし

くさぐさの色ある花によそはれし棺のなかの友うつくしき

五つとせは夢にあらずよみそなはせ春に色なき草ながき里

すげ笠にあるべき歌と強ひゆきぬ若葉よ薫れ生駒葛城

裾たるる紫ひくき根なし雲牡丹が夢の真昼しづけき

紫のわが世の恋のあさぼらけ諸手のかをり追風ながき

このおもひ真昼の夢と誰か云ふ酒のかをりのなつかしき春

みどりなるは学びの宮とさす神にいらへまつらで摘む夕すみれ

そら鳴りの夜ごとのくせぞ狂ほしき汝よ小琴よ片袖かさむ（琴に）

ぬしえらばず胸にふれむの行く春の小琴とおぼせ眉やはき君（琴のいらへて）

去年ゆきし姉の名よびて夕ぐれの戸に立つ人をあはれと思ひぬ

十九のわれすでに菫を白く見し水はやつれぬはかなかるべき

ひと年をこの子のすがた絹に成らず画の筆すてて詩にかへし君

白きちりぬ紅きくづれぬ床の牡丹五山の僧の口おそろしき

今日の身に我をさそひし中の姉小町のはてを祈れと去にぬ

秋もろし春みじかしをまどひなく説く子ありなば我れ道きかむ

さそひ入れてさらばと我手はらひます御衣(みけし)のにほひ闇(やみ)やはらかき

病みてこもる山の御堂に春くれぬ今日(けふ)文ながき絵筆とる君

河ぞひの門(かど)小雨ふる柳はら二人(ふたり)の一人(ひとり)めす馬しろき

歌は斯くよ血ぞゆらぎしと語る友に笑まひを見せしさびしき思

とおもへばぞ垣をこえたる山ひつじとおもへばぞの花よわりなの

庭下駄に水をあやぶむ花あやめ鋏(はさみ)にたらぬ力をわびぬ

柳ぬれし今朝門(けさかど)すぐる文づかひ青貝(あをがひ)ずりのその箱ほそき

『いまさらにそは春せまき御胸なり』われ眼をとぢて御手にすがりぬ

その友はもだえのはてに歌を見ぬわれを召す神きぬ薄黒き

そのなさけかけますな君罪の子が狂ひのはてを見むと云ひたまへいさめますか道ときますかさとしますか宿世のよそに血を召しませな

もろかりしはかなかりしと春のうた焚くにこの子の血ぞあまり若き

夏やせの我やねたみの二十妻里居(はたちづまさとる)の夏に京を説く君

こもり居に集(しふ)の歌ぬくねたみ妻五月(さつき)のやどの二人(ふたり)うつくしき

舞姫

人に侍る大堰(おほゐ)の水のおばしまにわかきうれひの袂の長き

くれなゐの扇に惜しき涙なりき嵯峨のみじか夜暁(あけ)寒かりし

朝を細き雨に小鼓(こつづみ)おほひゆくだんだら染の袖ながき君

人にそひて今日(けふ)京の子の歌をきく祇園清水(ぎをんきよみづ)春の山まろき

くれなゐの襟にはさめる舞扇(まひあふぎ)酔のすさびのあととめられな

桃われの前髪ゆへるくみ紐やときいろなるがことたらぬかな

浅黄地に扇ながしの都染(みやこぞめ)九尺のしごき袖よりも長き

四条橋(ばし)おしろいあつき舞姫のぬかささやかに撲つ夕あられ

さしかざす小傘(をがさ)に紅き揚羽蝶(あげはてふ)小褄とる手に雪ちりかかる

舞姫のかりね姿ようつくしき朝京(きやう)くだる春の川舟

紅梅に金糸のぬひの菊づくし五枚かさねし襟なつかしき

舞ぎぬの袂に声をおほひけりここのみ闇の春の廻廊(わたどの)

まこと人を打たれむものかふりあげし袂このまま夜をなに舞はむ

三たび四たびおなじしらべの京の四季おとどの君をつらしと思ひぬ

あてびとの御膝(みひざ)へおぞやおとしけり行幸源氏(みゆきげんじ)の巻絵(まきゑ)の小櫛(をぐし)

しろがねの舞の花櫛おもくしてかへす袂のままならぬかな

四とせまへ鼓うつ手にそそがせし涙のぬしに逢はれむ我か

おほつづみ抱(か)へかねたるその頃よ美き衣(よきぬ)きるをうれしと思ひし

われなれぬ千鳥なく夜の川かぜに鼓拍子(つづみびやうし)をとりて行くまで

いもうとの琴には惜しきおぼろ夜よ京の子こひし鼓のひと手

よそほひし京の子すゑて絹(きぬ)のべて絵の具とく夜を春の雨ふる

そのなさけ今日舞姫(まひひめ)に強(し)ひますか西の秀才(すさい)が眉よやつれし

春思

いとせめてもゆるがままにもえしめよ斯くぞ覚ゆる暮れて行く春

春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手にさぐらせぬ

夜の室に絵の具かぎよる懸想の子太古の神に春似たらずや

そのはてにのこるは何と問ふな説くな友よ歌あれ終の十字架

わかき子が胸の小琴の音を知るや旅ねの君よたまくらかさむ

松かげにまたも相見る君とわれゑにしの神をにくしとおぼすな

きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手なほ肩に有りとも思ふ

歌は君酔ひのすさびと墨ひかばさても消ゆべしさても消ぬべし

神よとはにわかきまどひのあやまちとこの子の悔ゆる歌きかますな

湯あがりを御風めすなのわが上衣ゑんじむらさき人うつくしき

さればとておもにうすぎぬかづきなれず春ゆるしませ中の小屏風

しら綾に鬢の香しみし夜着の襟そむるに歌のなきにしもあらず

夕ぐれの霧のまがひもさとしなりき消えしともしび神うつくしき

もゆる口になにを含まむぬれといひし人のをゆびの血は涸れはてぬ

人の子の恋をもとむる唇に毒ある蜜をわれぬらむ願ひ

ここに三とせ人の名を見ずその詩よまず過すはよわきよわき心なり

梅の渓の靄くれなゐの朝すがた山うつくしき我れうつくしき

ぬしや誰れねぶの木かげの釣床の網のめもるる水色のきぬ

歌に声のうつくしかりし旅人の行手の村の桃しろかれな

朝の雨につばさしめりし鶯を打たむの袖のさだすぎし君

御手づからの水にうがひしそれよ朝かりし紅筆歌かきてやまむ

春寒のふた日を京の山ごもり梅にふさはぬわが髪の乱れ

歌筆を紅にかりたる尖凍てぬ西のみやこの春さむき朝

春の宵をちひさく撞きて鐘を下りぬ二十七段堂のきざはし

手をひたし水は昔にかはらずとさけぶ子の恋われあやぶみぬ

病むわれにその子五つのをととなりつたなの笛をあはれと聞く夜

とおもひてぬひし春着の袖うらにうらみの歌は書かさせますな

かくて果つる我世さびしと泣くは誰ぞしろ桔梗さく伽藍のうらに

人とわれおなじ十九のおもかげをうつせし水よ石津川の流れ

卯の花を小傘にそへて褄とりて五月雨わぶる村はづれかな

大御油ひひなの殿にまゐらするわが前髪に桃の花ちる

夏花に多くの恋をゆるせしを神悔い泣くか枯野ふく風

道を云はず後を思はず名を問はずここに恋ひ恋ふ君と我と見る

魔に向ふつるぎの束をにぎるには細き五つの御指と吸ひぬ

消えむものか歌よむ人の夢とそはそは夢ならむさて消えむものか

恋と云はじそのまぼろしのあまき夢詩人もありき画だくみもありき

君さけぶ道のひかりの遠を見ずやおなじ紅なる靄たちのぼる

かたちの子春の子血の子ほのほの子いまを自在の翅なからずや

ふとそれより花に色なき春となりぬ疑ひの神まどはしの神

うしや我れさむるさだめの夢を永久にさめなと祈る人の子におちぬ

わかき子が髪のしづくの草に凝りて蝶とうまれしここ春の国

結願のゆふべの雨に花ぞ黒き五尺こちたき髪かるうなりぬ

罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながくつくられし我れ

そとぬけてその靄おちて人を見ず夕の鐘のかたへさびしき

春の小川うれしの夢に人遠き朝を絵の具の紅き流さむ

もろき虹の七いろ恋ふるちさき者よめでたからずや魔神の翼

酔に泣くをとめに見ませ春の神男の舌のなにかするどき

その酒の濃きあぢはひを歌ふべき身なり君なり春のおもひ子

花にそむきダビデの歌を誦せむにはあまりに若き我身とぞ思ふ

みかへりのそれはた更につらかりき闇におぼめく山吹垣根

ゆく水に柳に春ぞなつかしき思はれ人に外ならぬ我れ

その夜かの夜よわきためいきせまりし夜琴にかぞふる三とせは長き

きけな神恋はすみれの紫にゆふべの春の讃嘆(さんたん)のこゑ

病みませるうなじに繊(ほそ)きかひな捲きて熱にかわける御口(みくち)を吸はむ

天の川そひねの床のとばりごしに星のわかれをすかし見るかな

染めてよと君がみもとへおくりやりし扇かへらず風秋(あき)となりぬ

たまはりしうす紫の名なし草うすきゆかりを歎きつつ死なむ

うき身朝をはなれがたなの細柱(ほそばしら)たまはる梅の歌ことたらぬ

さおぼさずや宵の火かげの長き歌かたみに詞あまり多かりき

その歌を誦(ず)します声にさめし朝なでよの櫛の人はづかしき

明日(あす)を思ひ明日の今おもひ宿の戸に倚る子やよわき梅暮れそめぬ

金色(こんじき)の翅(はね)あるわらは躑躅(つつじ)くはへ小舟(をぶね)こぎくるうつくしき川

月こよひいたみの眉はてらさざるに琵琶だく人の年とひますな

恋をわれもろしと知りぬ別れかねおさへし袂風の吹きし時

星の世のむくのしらぎぬかばかりに染めしは誰のとがとおぼすぞ

わかき子のこがれよりしは鑿のにほひ美妙(みめう)の御相(みさう)けふ身にしみぬ

清し高しさはいへさびし白銀(しろがね)のしろきほのほと人の集見(しふ)し（酔茗の君の詩集に）

雁(かり)よそよわがさびしきは南なりのこりの恋のよしなき朝夕(あさゆふ)

来し秋の何に似たるのわが命せましちひさし萩よ紫苑よ

柳あをき堤にいつか立つや我れ水はさばかり流とからず

幸(さち)おはせ羽やはらかき鳩とらへ罪ただしたる高き君たち

打ちますにしろがねの鞭うつくしき愚かよ泣くか名にうとき羊(ひつじ)

誰に似むのおもひ問はれし春ひねもすやは肌もゆる血のけに泣きぬ

庫裏(くり)の藤に春ゆく宵のものぐるひ御経(みきやう)のいのちうつつをかしき

春の虹ねりのくけ紐たぐります羞ひ神(はぢろがみ)の暁(あけ)のかをりよ

室(むろ)の神に御肩(みかた)かけつつひれふしぬゑんじなればの宵の一襲(ひとかさね)

天(あめ)の才(さい)ここににほひの美しき春をゆふべに集(しふ)ゆるさずや

消えて凝(こ)りて石と成らむの白桔梗(しろぎきやう)秋の野生(のおひ)の趣味(しゆみ)さて問ふな

歌の手に葡萄をぬすむ子の髪のやはらかいかな虹のあさあけ

そと秘めし春のゆふべのちさき夢はぐれさせつる十三絃よ

青空文庫情報

底本：「みだれ髪」新潮文庫、新潮社
　　2000（平成12）年1月1日発行
底本の親本：「みだれ髪」名著複刻全集　近代文学館、日本近代文学館
　　1968（昭和43）年12月発行
初出：「みだれ髪」東京新詩社・伊藤文友館
　　1901（明治34）年8月15日発行
※このファイルには、青空文庫からリンクされている以下のテキストを、上記底本にそって修正し、組み入れました。
「みだれ髪（明治34年）」（入力：岡島昭浩、大阪大学のサイト（http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/bungaku.htm）で公開）
※初出の復刻版をもとにした底本は、本文では誤植もそのままなぞり、別に、監修者、松平盟子による訂正表を掲載しています。このファイルでは、同表において誤りとされた箇所をあらため、「［#「…」は初出では「…」］」の形式で注記しました。
※底本編集時に、＊を添えて新たに付されたルビは、入力しませんでした。
※解説の便宜のために、底本編集時に加えられた通し番号は、入力しませんでした。
入力：田中哲郎
校正：富田倫生
2012年2月8日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みだれ髪

与謝野晶子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/